

# JISS *Bulletin*

一般社団法人スウェーデン社会研究所 所報 第 381 号



Photo: European Parliament, 2019 年 4 月 16 日

## 【スウェーデンの点描】 グレタ・トゥーンベリ

昨年、日本はもちろん世界で最も話題になったスウェーデン人といえば、彼女を置いて他にいません。2003 年生まれで現在 17 歳の彼女は、15 歳の夏から金曜日に学校を休んで「気候のための学校ストライキ」を始

めた彼女は、今の政治家たちが気候温暖化問題に真剣に向き合っていないと考える、彼女と同世代の若者を中心とした世界中の多くの人々の共感を呼び起こし、「将来のための金曜日」運動の火付け役となりました。

【2019年10月3日 JISS-EIJS 研究講座】

『スウェーデンの中の日本 (The idea of Japan in Sweden)』

モニカ・ブラウ氏 (ジャーナリスト)

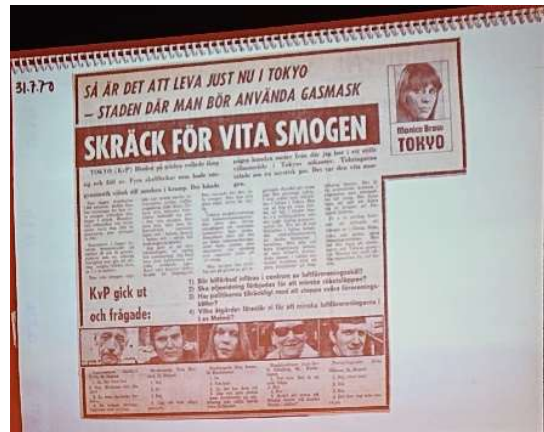


今回は、スウェーデンにおいて日本に対する考え方がこの 50 年間でどのように変わっていったかを、スウェーデンの高名な知日派ジャーナリストの1人である、モニカ・ブラウさんにお話しいただきました。

1969 年にジャーナリストとして初めて来日し、日刊紙スベンスカ・ダグブラーデットの東京特派員として活躍したモニカさんは、広島・長崎の原爆についてのアメリカの検閲についての論文で、日本史の博士号を修得しました。彼女は、その他の日本に関する多くの著作を発表し、スウェーデンにおいて日本に関する知識を広めた努力が評価され、旭日章を授与されています。

講演は、50 年前のスウェーデンの新聞記事で書かれていた日本についてのお話から始まりました。「英国から輸入された犬は日本国内では良く扱われず、飼い主側は悲しんだ。」と書かれた記事が紹介され、1969 年の段階でこういう記事が出る時点で日本のことは、スウェーデンをはじめとした世界各国で全然知られていなかったことがわかりまし

た。



また、同じ年代の記事として、公害や大気汚染に関する記事に関してお話されていました。当時海外ではこの噂を聞き、東京の街はガスマスクが必要だと思われていたそうです。



記事には「4 人の女の子が倒れ、多くの学童が病気にかかった。」と書かれており、日本の空気は、光化学スモッグによってひどく汚染されていると誇張されていました。

1970 年代になると日本の造船業は世界で

注目され、彼女の故郷のマルメでは大きな話題になったそうです。マルメも造船業で栄えた町だったそうです。当時の日本の造船業は競争力が高く、ヨーロッパは市場の三分の一に抑えてくれという交渉も行っていたくらいだったようです。現在では、日本も、欧州も、共に韓国の造船を抑えたいと思うようになってしまいました。マルメにあったクレーンなど造船に必要なものでシンボリックなものは、韓国の蔚山(ウルサン)に移ってしまったそうです。この頃の記事から、日本の成長が世界でも注目され始めていたことが分かります。

また、彼女は田中角栄元内閣総理大臣にも取材をした経験があるそうです。スキャンダルや日本の政治の決め方に関して多くの方に取材されてきたそうですが、その中でも、田中角栄氏は非常にチャーミングな方で、はっきりものを言う方で、愛すべき人だと思っておっしゃっていました。田中角栄氏にインタビューしたときは、会って話していただけで、皮膚感覚で日本の政治家の票の集め方を感じ取ったそうです。人としての付き合いを大切にしている、特に田中氏は全国各地を訪れ、繋がりを大切にしていたことがその理由です。これはスウェーデンとは大きく異なり、日本とスウェーデンは人的なつながりを意識しますが、スウェーデンは政党を見て投票す

るので、候補者が誰というのはあまり関係ないという点で、日本の政治家との票の集め方の差を感じた瞬間だったそうです。

最後に近年の日本の雇用や労働についてお話いただきました。

日本の終身雇用というのは、スウェーデンの人々からすると、一生牢屋にいるようなもので、一社に入れば安心だという感覚が理解できなかったと、やはり言われていました。日本の安全志向というのは大手の会社に入るために、良い幼稚園に入って、良い大学を出ることが目的になってしまっている、ということを強く指摘されています。スウェーデンをはじめ、北欧の国々はそういった安全や、生活の保障は政府がしっかりと行っているので、スウェーデン人の感覚からすると20代で会社に入って、同じ会社にいたら、新しいチャレンジ、挑戦もせずにつまらない人生に見えてしまうそうです。

今回は、いくつかの新聞記事やエピソードをもとに、この50年でヨーロッパをはじめとした世界における日本への認知度やイメージというものが大きく変わってきた流れを、外からの視点で学ぶ事ができました。

[記録：明治大学国際日本学部4年

渡邊 駿太]

## 【2019年10月31日 研究講座】

『大学生の北欧研修報告—学生たちは北欧から何を学んだか』

明治大学国際日本学部鈴木ゼミ学生

東洋大学国際学部藪長ゼミ学生

特定非営利法人アイセック・ジャパン Education for Dream プロジェクト参加学生

今回の研究講座は、『大学生の北欧研修報告—学生たちは北欧から何を学んだか—』というテーマで行いました。今夏に初めて北欧諸国を訪れ、様々な体験をしてきた大学生たちが登壇し、彼ら、彼女らが何を学んだかを報告していただきました。今回は3部構成となっており、明治大学国際日本学部鈴木ゼミ学生、東洋大学国際学部藪長ゼミ学生、特定非営利法人アイセック・ジャパン Education For Dream プロジェクト参加学生による活動報告となっています。

はじめに、明治大学国際日本学部鈴木ゼミ学生(以下、鈴木ゼミ生)による発表でした。今年の鈴木ゼミの北欧研修では、デンマーク、スウェーデン、フィンランドの3か国を訪問したとのことでした。彼らは訪れた現地で、東洋大学の藪長ゼミ学生や、コペンハーゲン大学の現地学生と交流を行ったほか、多くの場所を訪れました。



ボルボミュージアム見学では、ボルボ社の自

動車開発の歴史を知る機会があったようです。ボルボ社の自動車というと3点式シートベルトが非常に有名ですが、衝突性能の高さも非常に素晴らしいものがあります。衝突性能を高めた事には、北欧らしい理由がありました。ヘラジカが車道に出てきて、融雪剤をなめてしまう際に、自動車と衝突してしまう事故が多発していたために、人の命を守りたいという事から、より衝突性能を高めたそうです。

さらに、VOLVOの現地社員の方にワークスタイルに関して、インタビューを行った報告もありました。労働時間は週 40 時間で、在宅労働(リモートワーク)も可能でした。社外に仕事を持ち出すことによって、情報漏洩のリスクがありますが、会社が社員一人一人を信頼しているため、さほど問題視されていないようでした。また、男性女性どちらも育児に携わるのが当たり前であり、会社でも男女は平等であるという考えが徹底されていました。国民性として、相手への気持ち、社員一人一人を大切にしているというのが伝わってくる内容でした。

この北欧諸国の「相手を信頼する国民性」の学びの例がいくつかありました。デンマークにおいて、日頃から、ある程度政府を信頼している国民性と、数年かけて周到な準備をしている政府の信頼関係が自動車の話においても例がありました。もともと右ハンドルだったところから左ハンドルに変更したことが、例として挙げられていました。さらに、スウェーデンの自主

性や自立に重きを置いた教育が国民性となって表れている様子もうかがえました。スウェーデンでは、Homeを基盤に、外に出ないから家が大事、だから家の中の家具にこだわるといった考えがあるようです。この考えがベースとなり、組み立て式の多い商品、自立の文化を反映させているというのも自立が促されている北欧社会の仕組みや考えが反映されているとのことでした。IKEAをはじめとした北欧企業の製品にもこの色が出ているのが感じられます。

東洋大学国際学部藪長ゼミの学生からも、北欧諸国での研修の成果が報告されました。

彼らは、北欧からの学びの中で、各々個人の研究テーマを設定し、そのテーマに関連した情報収集の訓練もかねて、現地へ足を運んでいました。その中で、ある学生がフィンランドの社会人の休暇について、研究していました。



実際にヘルシンキなどで現地の方にインタビューを行い、生の声を聞いたとのことでした。

調査の結果としては、やはり北欧の人々は休暇を自分の時間として非常に大事にしており、休暇中は仕事のメールや電話は一切しないとのことでした。また、長期休暇では国外への旅行をする事も多く、休暇中は、同僚に仕事を任せているとのことでした。日本とは少し異なる感覚です。その他にも、皆さん多くの研

究内容を発表されており、実際に現地で情報収集を積極的にされていた様子が伝わってくる報告でした。

最後に、AIESEC のプログラムに参加した学生の活動報告がありました。AIESEC のプログラムは、海外インターンシップを通じて、社会課題に触れるような活動や、就労経験を通じて、リーダーシップを養う事が目的とされています。



その中で、ストックホルム市立の小学校に先生として6週間勤務された学生がおられました。ただ勤務し、子供と触れ合っただけでなく、実際に働き、過ごすことで、スウェーデンの働き方に感化されたというコメントが印象的でした。小学校のうちから、積極的に主張する事の大切さを教えていた環境や、生活面でのゆとり、ポジティブ思考の人生、教育と文化との結びつきから、新たな価値観を学ぶ事ができたとのことでした。

今回は様々な学生による北欧からの学びを聞く事ができました。また、北欧の社会からの学びは、多くの学生が感化されていたようでした。

[記録：明治大学国際日本学部4年  
渡邊 駿太]

【2019年12月 JISS—大使館共催 デモクラシーセミナー】

『Sweden—The Untold Story』

クラウディア・ワリン氏（ジャーナリスト）

通訳：アップルヤード和美氏

今回は、昨年英語に翻訳された Claudia Wallin 著「Sweden -The Untold Story」の日本語版「あなたの知らない政治家の世界-スウェーデンに学ぶ民主主義」の出版を記念し、著者のクラウディア・ワリン（Claudia Wallin）氏をスウェーデンから招いて講演会を行いました。

同書は、2014年にポルトガル語で出版され、ブラジルでベストセラーになった後に英訳版が出版され、この度はそれをさらに日本語に翻訳したものです。

ワリン氏はブラジル出身のジャーナリストで、ロンドンで TV Globo のヨーロッパ支局長、International Herald Tribune TV のディレクター、BBC World Service のプロデューサーを務めました。ロンドンでスウェーデン人のパートナーと出会ってスウェーデンに移住し、2003年からはスウェーデンを拠点として活躍されています。

冒頭にスウェーデン大使館のスヴェン・オストベリ参事官よりご挨拶をいただいた後、同書の翻訳を手掛けた大使館職員のアップルヤード和美氏の通訳のもとで、講演が始まりました。

ワリン氏が初めに紹介したのは、つい100年ほど前のストックホルムの貧しい姿でした。19世紀に人口の4分の1の流出を経験したこの貧しい国が、どうやって現在のような世界の模範たる国にまで発展したのか。ワリン氏はその理由を透明性、税

金の尊重、特権のない政治家といった、同国の民主主義のあり方に求めています。



彼女にそのような考え方をもたらしたインスピレーションの1つとなったのが、カール・ビルト外相・元首相との、街中のスーパーマーケットでの遭遇でした。他の人々と同じようにカートを押してトマトを買っている姿は、とてもショッキングでした。その数か月後にはストックホルムの市長が地下鉄で通勤する姿を目撃しました。このようにスウェーデンでは、高い地位にある政治家が普通の市民として生活しているのです。そして「政治家は人々に奉仕されるのではなく、奉仕するものだ」

ということが、スウェーデンでは実践されているのです。

ワリン氏は、そうした姿を母国ブラジルの人々に知ってもらいたいと思い、ドキュメンタリー番組を制作しました。講演では、その映像も披露していただきました。

ところでスウェーデンは男女平等も進んでいます。ですから男性の政治家も、議員宿舎では全ての家事を自分でこなします。そこで紹介されたのが、ヨーラン・ペーション首相のアイロンがけのビデオです。彼はワイシャツのアイロンがけを1分でできるということで、実際にテレビ番組で時間を図ってそれを検証するというものでした。

このような特権なき政治文化は、市民が政治家を尊敬していないということではありません。人々は政治家をリーダーとして尊敬しているけれども、その関係はあくまで上下関係ではなく、横並びの関係であるということです。

国会議員の月給は約 6500 ユーロで、これは小学校の教員の2倍とされています。地方議員には月給はなく、出勤手当として月3万円程度が支給されるのみです。

不逮捕特権はなく、移動手段として電車ではなくタクシーを使えばそれが問題となります。1995年、当時副首相であったモ

ナ・サーリン氏が数千円のトブラローネ(チョコバー)を議員のクレジットカードで買ったことが明るみになって辞職しました。2000年代には、税金を支払わずに子守りを雇った「ナニーゲート」事件で2人の大臣が辞職しました。いったん不正が起これば、それに対しては厳正に対処するのがスウェーデンなのです。

スウェーデンはまた、情報公開が非常に進んでいます。たとえば国会議員の日々の通信記録や月給の情報は、一般の市民がすぐに閲覧することができます。

投票率も非常に高いです。前回の選挙の投票率は87%で、高校以上の教育を受けた人の投票率は95%でした。彼らに話を聞くと「民主主義を守るために投票に来た」と言うのです。

講演は、1980年代と90年代の2度に渡り首相を務めたイングマル・カールソン氏へのインタビューで締めくくりました。本当に小さなアパートに暮らし、取材に来たワリン氏に自分でコーヒーを入れ、引退した後もつつましやかな暮らしをするカールソン氏に対するワリン氏の驚きと尊敬は、講演会に参加した私たちにも強く伝わりました。

[記録：鈴木 賢志]

【2020年1月研究講座】

『スウェーデンの政治意識—日本との比較を通じて学ぶこと』  
明治大学国際日本学部鈴木ゼミ9期生

2011年より毎年恒例とさせていただいております明治大学国際日本学部鈴木ゼミの今年の研究テーマは「政治意識」でした。学生たちは6つのグループを作り、様々な角度から日本とスウェーデンの政治意識の違いを比較し、考察しました。



①『なぜ日本ではグレッタ・トゥーンベリが生まれないのか』(稲垣眸 齋藤明日香 野原優衣 藤井翔生)

本研究では、世界各地に広がった「グレッタ・トゥーンベリ現象」が、日本ではなぜあまり盛り上がらないのか、という問いに答える形で、スウェーデンでは自分の誇りの高さが政治参加への態度に結び付かないのに、日本ではそれらが結びついてしまうこと、また日本では、社会問題に関心を持ったり、デモなどで既存の枠組みに対抗したり

することが阻まれる社会的環境が根強いことを明らかにしました。

②『日本の「民主主義」とスウェーデンの「民主主義」』(西山由夏 水澤芽生)

本研究では、「自分が政治に参加しても、何も変わらない」と思っている人が日本に多いのは、民主主義的な意識の持ち方がスウェーデンとは異なっているからではないか、という問いを立て、自分の意見を持ち発信することや、社会の決まりを自分たちが変えることができるという意識を持ちにくく、かつ日常で政治を話題にすることがはばかれるという、日本の民主主義の特性を明らかにしました。

③『スウェーデンにおける男女の「対等性」』(井上航太)

本研究では、通常「平等」と訳されることの多い *jämställdhet* という語について、実は「平等」ではなく「対等」と訳した方が概念上の適合性が高いという仮説に基づいて、スウェーデンの育児休業制度や同一価値労働同一賃金制度が、男女「平等」というよりは男女「対等」を目指したものであることを示し、「対等」であるからこそ、「違い」を認めたくて「支えあい」ができることが重要であることを示しました。



④『デモクラティックな思想と貧富の格差』  
(安岡直紀)

本研究では、アメリカに見られるような貧困層の投票意識の低さが日本にも当てはまるのではないかと、という問いから出発しながら、実は日本では所得と投票意識の間に明確な相関関係がないことを明らかにした上で、日本では低所得者層の人々も高所得者層と同じ程度に投票するものの、前者は政治的知識が不十分なまま、投票することを義務とらえて投票しているように見受けられ、この点がスウェーデンとの決定的な違いであることを明らかにしました。

⑤『「IKEA と無印」－政治文化と企業文化の共通性の研究』(渡邊駿太 山本大貴 長久保光祐 藪内奈津子 伊藤梓)

本研究は、IKEA と無印という、ともにスウェーデンと日本を代表する世界的企業の成功の秘訣が、それぞれの出身国の政治文化を色濃く反映しているのではないかと、という仮説に基づき、IKEA が新たなライフスタイルや商品を積極的に「発信」する企業であるのに対して、無印は顧客のニーズに徹底的に耳を傾け、それを反映した商品を開発しようという「受信」型の企業であることを明らかにしました。

その上で、スウェーデンと日本の企業文化や政治文化の違いを「優劣」として捉えるのではなく、お互いの特徴を強みとして活

かすことが重要であることを指摘しました。

⑥『投票率 85%の国では小学生に何を教えているのか』(佐野沙也加 金田慎吾 岡里咲佳 阿部夏己 橋本芽依 寺本 楓 笠原来夢 福室麻衣)

本研究では、まず 2019 年 11 月に 70 名を集めて実施したワークショップの実践報告を行いました。

ワークショップでは、スウェーデンの小学校社会科の教科書に掲載されている、「独裁国家を民主的にするための条件」についての問題について考え、また SNS を用いて意見を発信することが大切であるという教科書のメッセージから出発して、日本をより民主的にするために行うことのできる「発信」活動について議論しました。さらに「スウェーデンのエッセンスを取り入れた日本教育改革案」を考えるブレインストーミングを行いました。

学生たちは、そうして生まれた様々なアイデアを紹介し、また参加者のアンケート結果をまとめた上で、ワークショップを通じて彼らを感じたことを述べ、また今後の日本の教育が向かうべき方向性として「暗記型プラスαで当事者意識を育てていく」ということが重要であるということを通じて、発表を終えました。

[記録：鈴木 賢志]

【2020年2月研究講座】

『師弟、ヘンデル先生と弟子ルーマン』

講演：飯田大介氏 演奏：アジア・コレギウム・ムジクム

今回は、飯田大介氏と彼が主催するアジア・コレギウム・ムジクムによる、「スウェーデン音楽の父」ユーハン・ヘルミク・ルーマン(Johan Helmich Roman, 1694-1758)作曲のバロック音楽の演奏会を行いました。

ルーマンはストックホルムに生まれ、1711年にヴァイオリン兼オーボエ奏者として王宮礼拝堂の一員となり、その16年後にはスウェーデン王立管弦楽団の首席指揮者の地位につきました。1731年にはスウェーデンで初めて一般聴衆向けの公開演奏会を開いたことでも知られています。

また彼の音楽は、彼よりも9年先にドイツで生まれたヘンデルの影響を強く受けたことが知られていることから、本演奏会では同じ「トリオ・ソナタ」という曲をヘンデル版とルーマン版とで聞き比べるという興味深い試みも行われました。

なお、演奏はふだん研究講座を行うオーディトリウムではなく、ホールで行われました。ホールの方が天井が高く、バロック音楽が演奏される教会のつくりにより近いというのが、その理由です。

椅子の数の制限のため、参加者は30名余りと限られてしまいましたが、その分だけ贅沢な時間を楽しむことができました。



[記録：鈴木 賢志]